

# 盆栽の図像学

## 第十七回

### 楊齋延一《四つ目牡丹園満開之図》

解説／田口文哉

#### 浮世絵にみる江戸・明治の盆栽

##### 牡丹の客

「早船（はやふね）、四ツ目の牡丹……大人（おとな）四銭。」

明治時代の小説家、永井荷風の短編小説『牡丹の客』（翔山書店、明治44年（1901）7月）には、登場人物の芸者がふと目に入った隅田川沿いの看板を読んだ、こんな一文が記されている。

この物語は、「小（こ）れんと云ふ芸者と二人連れ、ふいと其の場の機会で、本所の牡丹を見にと両国の橋だもたら早船に乗った。」というくだりからはじまる。その内容は、主人公が一度は所帯をもった芸



者小れんと、ある五月末頃に連れたつて本所（現在の東京都墨田区南部一帯）にある牡丹園に行く際の二人のやりとりを記したものである。この小説を紹介したのも、実は、この物語の舞台となる本所の牡丹園こそ、幕末から植木業を営み、明治時代には東京の newName としてたくさんのお客でにぎわいを見せた、「植文」こと成家文蔵の牡丹園（芍薬園）であり、今月紹介する楊齋延一による《四つ目牡丹園満開之図》の舞台に他ならないからである。（植木屋の歴史については、平野恵「描かれた明治の植木屋の庭―江戸の継承―」（ウキヨエ盆栽園）さいたま市大宮盆栽美術館、2012年所収）

ほかを参照）。  
今月は、小説の舞台となるほど人気を誇った植木屋の庭を描いた図を紹介する。まずはこの図にあらわされた情景や牡丹などの鉢物の姿を見ていこう。

##### 咲き誇る牡丹

「鉢植えに二つ咲きたる牡丹の花 くれなる深く夏立ちにける」（明治33年・1900）と、明治時代の俳人・正岡子規は牡丹を題材に歌を詠んだ。子規にはこれ以外にも、いずれも鉢植に植えられた数多くの牡丹を詠んだ歌や俳句がある。子規の随筆を見ると、病床に臥したままの彼のもとには友人から本などとともに、たくさんのお盆がプレゼントされていたことがわかる。床にいても楽しむことができ、なによりも俳人として四季を感じることもできる盆栽が選ばれて贈られていたのであろう。牡丹は夏の季語であり、咲き誇る牡丹が満開の庭の情景を描いたものが本図である。

画面前景には、中央と右に床几が置かれ、毛氈が敷かれた上に女性が座って煙管を持ち、右ではお茶を勧められているところである。それぞれの脇に建てられたよしずの張られた覆いの内には、三段式の棚に大きな染付鉢に植えられた牡丹が色とりどりの花を咲かせている。まさに題名にあるとおり満開の図である。特に左の棚の牡丹は大きく、手前から龍や胡蝶、そして氷裂文などの鉢の文様や、12点置かれたそれぞれの花の品種もすべて残らず描き分けられている。さらに品種名が記された札を挿した鉢があり、下段左から「綾立巻」、「菊牡丹」、中段は「曙」、「代々替」、上段は「車錦」等とその種類もある程度は特定が可能である。

こうした牡丹の前には、その花の姿に魅入られているような少女が一人、向こうを向いて微動だにしない姿で立つ。比べれば、牡丹の花は少女の顔よりも大きい。正岡子規には「大きさは禿（かぶろ）・子どものこと」の顔の牡丹哉（明治26年）という俳句もあるが、実際にはこれほど大きな花は実在しない。たしかに、これを絵師の

楊齋延一《四つ目牡丹園満開之図》  
大判錦絵三枚続 右：37.4×25.1cm 中：37.5×25.1cm 左：37.4×25.0cm 明治28年（1895）5月  
版元／森本順三郎 個人蔵

浮世絵師紹介  
楊齋延一（ようさいのぶかず） 明治5年～昭和19年（1872～1944）  
明治時代に活躍した浮世絵師。同時代に最も作例を残した楊洲周延の門下となる。師同様に江戸時代の風俗をモチーフにした美人画や、同時代の風俗画、そして三枚続の画面形式を活かした日清戦争の戦争画を多く描いている。



誇張と言えはそれまでの話ではある。しかしたとえ現代の映像でも簡単には表現することのできない、絵ならではの「巨大化」という方法だからこそ、満開の牡丹園の雰囲気や、それにとらわれた少女の姿をみごとにあらわすことができるのである。本図のそうした絵画表現上の可能性を見逃すことはできないだろう。

##### 四つ目牡丹園への舟

冒頭に挙げた永井荷風の『牡丹の客』から、二人の牡丹園への道のりを見てみよう。二人は「早船」と呼ばれる小さな乗り合い舟に乗って、四つ目牡丹園をめざしているのである。

ぜひこのあたりの地図を横に置いていただきたい。二人は、現在もある両国橋（隅田川に神田川が合流する地点）の西岸で冒頭の舟の看板を見て乗り込んだようだ。舟は途中、少し南の浜町からの渡し舟（千歳ノ渡）と並んで隅田川を渡り東岸へ、現在の首都高速7号小松川線の下に流れる堅川に入っていく。堅川には現在も一之橋、二之橋、三之橋と大きな橋がかかっており、四之橋、つまり現在の四つ目通りの手前南側に目的の牡丹園があった。昭和初期には本図の牡丹園が著名なことから「牡丹橋」がかけられた箇所で、主人公たちはここで下船したのである。そして、岸を上がるとすぐに「建仁寺垣の門口に牡丹園と書いた札がかけて」あり、門を入ると大きな古木の鉢物が置かれて、さらに先によしず張りの囲いのなかに牡丹の花が並んでいたという。本図の垣根は柴垣で相違はあるが、遠景に見える門から庭の構造は同様である。そしてこうした牡丹園への道は、正岡子規の俳句「舟つけて裏門入れば牡丹哉」（明治27年・1894）にも同様に見ることが出来る。

小説は当時の観光スポットであった四つ目牡丹園への散策ルートを下敷きにして描かれているのである。ただし『牡丹の客』は明治44年の作で、本図の描かれた28年とは牡丹園の流行の度合いも異なるだろう。季節の設定も5月末のことで、花はしおれ主人公らカプルの倦怠感同様、疲れた様子であったようだ。しかし本図ではそれとはまったく反対に、いままさに盛り上がりを見せる四つ目牡丹園の盛況ぶりや牡丹そのものの存在感を、絵ならではの方法で語っているのである。（続く）

さいたま市大宮盆栽美術館のイベント告知  
■特別展「ウキヨエ盆栽園～盆栽デ、明治ヲアソブ」  
概要：盆栽尽くしの明治の浮世絵版画特別展。今回紹介した図も含め、名品、逸品、時には珍品の浮世絵版画で華やかな明治時代の盆栽文化を紹介します。  
会期：平成24年3月24日(土)～5月15日(火)  
(毎週木曜休館。但し5月3日は開館、4月18日(火)は休館)  
■埼玉県さいたま市北区土呂町2-24-3 ☎048-780-2091

著者プロフィール  
田口文哉（たぐち・ふみや）  
さいたま市大宮盆栽美術館学芸員。  
1977年生まれ。2009年、日本大学大学院芸術学研究所博士後期課程修了  
芸術学博士。勤務先である大宮盆栽美術館では絵画部門を担当。四季のうつろいにあわせ、盆栽があらわされた浮世絵を展示している。